

講義題目：問答の観点からの哲学

講義内容

問答関係は、理論哲学（言語、認識、形而上学）、実践哲学（行為、価値、物語）、社会哲学（社会、個人、法、道徳）において基礎的機能を果たしている。この講義では、問答の観点から哲学の諸問題に新しい光を当てることを目標とする。

講義計画

- 1 問いと推論はどう関係するのか？
- 2 疑問文の意味は何か？
- 3 問答の不可避性から、規則遵守問題にどう向き合うか？
- 4 問答関係からの分析／総合の区別の提案
- 5 「何か存在するのか？」という問いの前提 内的実在論か、直接実在論か
- 6 問答による共有知の構成
- 7 価値判断の不可避性:: 事実と価値の二元論批判はどこへ向かうのか？
- 8 責任や規範は社会的に構築されるのか？ 問う主体と責任主体の構成
- 9 社会問題と社会制度 国家と個人の分離、法と道徳の分離
- 10 資本主義と近代科学
- 11 個人的問題、お金への欲望、二階の欲求、自由意志
- 12 心の哲学と AI タイプとトークン
- 13 心の哲学と AI と法的責任の問題
- 14 問題解決過程としての物語
- 15 問うことは、どこへ向かうのか？

第 1 回講義 (20181005)

§ 0 導入：問いの重要性について

プラトン

「人間は自分が知っているものも知らないものも、これを探求することはできない。というのは、まず、知っているものを探求するということはあるまいだろう。なぜなら、知っている以上、その人には探求の必要はないわけだから。また、知らないものを探求するということもあり得ないだろう。なぜならその場合は、何を探求すべきかということも知らないはずだから」(プラトン『メノン』岩波プラトン全集？巻、p. 276)

ラッセル

「問いに対して正確な解答を得るために哲学を学ぶのではない。なぜなら、明確な解答は概して、それが正しいということを知りえないようなものだからである。むしろ問いそのものを目的として哲学を学ぶのである。なぜなら、それらの問いは、「何がありうるか」に関する考えをおしひろげ、知的想像力を豊かにし、多面的な考察から心を閉ざしてしまう独断的な確信を減らすからだ。」（ラッセル『哲学入門』ちくま学芸文庫訳、p.195）

ウィトゲンシュタイン

「表明できない解答に対しては、その問いも表明することができない。謎は存在しない。いやしくも問いを立てることができるのなら、その問いに答えることもできるのである。」（ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』6.5 節）

「生の問題の解決を人が認めるは、この問題が消え去ることによってである。（このことが、永い懐疑の末に生の意義がある人々に明かとなったときに、彼らがこの意義をどの点に存するかを語り得なかったことの原因ではないのか）」（同上、6.52 節）

#探求行為としての問い

動物も探索行動をする場合があるが、人間の場合には、何かを探求することは、問うことから始まる。しかし、私たちは、問うことよりも答えることを重要視しがちである。なぜなら、私たちは、答えをもとめており、問うことを求めるということは殆どないからである。なぜなら、始めに問いありきであり、問いから何かを求めるということが始まるからである。まれなことであるが、もし問いが求められているとすれば、言い換えれば、問題設定が求められているとすれば、それは「どんなふうに関心を持たいのか？」とか「どのように問題設定すべきか」という問いに対する答えを求めているのである。ここでも、すでに先行する問いがあり、その答えを求めるために役立つ問いが求められている。

探究である問いは、答えを求めたり、答えは問いの目的であり成果である。その意味では、問いは答えを得るための手段であり、答えは問いよりも重要である。しかし、主張は、問への答えとして成立し、問いを前提する。つまり、問いは主張の半製品であり、主張の半分はすでに問いによって与えられている。答えは問いを補完して、主張を完製品にするものである。答えとなる主張の基本部分は、問いにおいてすでに与えられている。間違った問題設定からは正しい答えは得られないし、愚かな問題設定からは愚かな答えしか得られないので、思考を正しく導くためには、正しい問題設定が必要である。したがって、問いに正しく答えることの前には、どのように問いを立てるかが重要である。問いは様々な前提を持つが、その問いの前提は、答えに継承され、答えの前提となる。この意味で、問いは答えよりも重要である。

認識論は、何を知りうるかを問うてきたが、何を問いうるかが、より重要なのではないか。存在論は、何が存在するかを問うてきたが、この存在への問いそのものを問うことがより重要なのではないか。価値論は、価値とは何かを問うてきたが、この問いの価値を問うことがより重要なのではないか。自由論は、意志が自由であるかどうかを問うてきたが、これを問うことと自由の関係を問うことがより重要なのではないだろうか。

哲学は、これまで主張にばかり注目してきたが、問いおよび問答関係に注目することがより重要なのではないだろうか。

オースティンは、これまでの哲学が、真理値を持つ言明を考察して、真理値を持たない言明を軽視してきたことを「記述主義的誤謬」と呼んで批判した。(オースティン『言語と行為』7)この記述主義的誤謬は、疑問文の理解においては、真理値を持つ言明を答えとする理論的問いだけを考察し、真理値を持たない発話、つまり命令や約束を答えとする実践的問いを考察してこなかったことに現れている。これを問いに関する「認識中心の誤謬」と呼ぶことができるだろう。問うことは、認識だけに関わるのではなくて、行為や意志の決定にも、道徳的判断やその他の評価にも関わっており、おそらく人間のすべての行為に関係している。したがって、問いの探求は、行為論や道徳論や社会哲学などにおいても重要な問いである。

ところで、オースティンを含めてこれまでの哲学は、平叙文にばかり注目して、疑問文にあまり注目してこなかった。私たちは、オースティンに倣って、これを「平叙文中心主義の誤謬」と呼べるだろう。この背後には、疑問文は、平叙文を変形することによって得られた文型であるという間違った理解があるのかもしれない。たしかに、私たちは平叙文を変形することによって疑問文をつくることができるが、しかし学習の段階では、平叙文の変形によって疑問文をつくることを学習するのではなくて、平叙文の構文を学習する前に、独自の構文として疑問構文を学習することが指摘されている。

「幼児は変形規則を用いて疑問文をつくっているのだというのではなくて、子供は他の構文と同じように疑問文をある特徴的な機能を持つ言語ゲシュタルトとして学習し、それは項目依拠的なものから徐々により抽象的なものへと変わっていくのである」(マイケル・トマセロ著『言葉をつくる』辻幸夫、野村益寛、出原健一、菅井三実、鍋島弘治朗、森吉直子訳、2008年、p.175)

この指摘が正しいならば、平叙文から疑問文をつくれるのは、平叙文がもともと半製品である疑問文を完成することによって作られたものだからである。

問うことについて問うことは、いわばメタレベルの問いであるので、これまでの哲学研究において主要な課題になってこなかったことは、いわば探求の自然な順序によるのかもしれない。認識についての認識することもまた、メタレベルの研究であるが、それは認識論と呼ばれて、近代哲学の中心的な課題になった。ロックは、すべての認識を感覚から説

明しようとし、その感覚あるいは感覚の報告を認識の基本要素と考えた。大陸合理論は、すべての認識を生得的な理性から説明しようとした。生得的な概念を認識の基本要素と考えた。これらに対して、カントは、直観の多様と、純粹悟性概念(カテゴリー)の結合である文を、認識や言語的意味の基本単位と考えたことは、ブランドムが指摘するようにカントの功績であるかもしれない。フィヒテとヘーゲルは、文が推論において成立することを指摘し、文のよりも推論をより基底的な認識の形態だと見なし、意味と認識の全体論を主張した。

近代の認識論における要素主義から全体論へのこのような展開を、フレーゲとラッセルに始まる20世紀の分析哲学の歴史は、言語哲学の立場でもう一度反復した。ところが、このような認識論や分析哲学の歴史において、今までのところ問いおよび問答関係の考察はほとんど行われていない。解釈学において、問いを主題的に扱うことがあった(コリングウッド、ガーダマー、など)が、それらは単発的な研究にとどまり継続的な研究伝統になっていない。その理由は、意識哲学における内観による分析に頼ったために、問いおよび問答関係の論理的、言語的、分析ができなかったことにあるのではないかと思われる。私たちは、20世紀の分析哲学の成果を踏まえることによって、問いおよび問答関係の分析に取り掛かることが可能になっているように思われる。

分析哲学は、言語分析によって哲学的な問題を解決しようとするアプローチである。それは、フレーゲとラッセルにはじまるものであり、それによって20世紀に哲学に言語論的転回が起こった。では言語論的転回によって、哲学にはどのような進歩がもたらされたのだろうか。

まず論理学をもちいて、フレーゲとラッセルによって数学を基礎付けることが試みはじまった。それは成功はしなかったが、数学の基礎付を考えるときの、議論を一変させた。自然数論の不完全性の証明が行われるなど、数学の基礎に関する認識は飛躍的に深まった。また、様々な論理学が提案され、論理学は、20世紀に非常に多様な議論が行われる領域になった。つぎに認識論について言うと、ラッセル、ウイトゲンシュタインの言語研究にも論理実証主義が科学の基礎づけの試みを行ったが、その限界が明確になり、クワインによる論理実証主義批判によって、科学観は実証主義からプラグマティズムへと大きく変わった。道徳の分野では、論理実証主義から、検証不可能である道徳的命題は無意味であるとの批判が行われ、それを踏まえて、道徳的命題の意味、真理性、などの問題が問われるようになった。

分析哲学は、従来の哲学的問題を解決するというよりも、従来の哲学的問題の問題設定の仕方を見直し、新しい形で問題設定をおこなった。さらに新しく設定しなおされた問題に取り組み中で、それまで全く疑われてことになった事柄、たとえば、分析と総合の区別、規則遵守の問題、などが重要な問題として新たに問われることになった。

ここで、以下で使用する用語の説明をしておきたい。

問いの区別

疑問文の文法的な区別

問いは疑問文で表現される。私たちは、疑問文を文法的な形式によって三つに区別できる。

決定疑問文:「はい」「いいえ」で答えることができ疑問文

補足疑問文:疑問詞を用いた疑問文。疑問詞には、「誰」「どれ」「いつ」「どこ」「どんな」「どのように」「何」「なぜ」などがある。

選択疑問文:「そばにしますか、うどんにしますか」というように選択肢を示して選択を求める疑問文があり、これを「選択疑問文」と呼びたい。「決定疑問」もある意味では、内容的には選択疑問の一種であると見なせるが、文法形式はかなり異なるので、区別しておきたい。

疑問文のこれらの形式はすべて、次の「理論的問い」と「実践的問い」の両方に使用できる。

理論的問いと実践的問いの区別

問いは、答えが真理値を持つものであるかどうかによって、次の二つに分けられる。その答えが真理値をもつとき、その問いを、「理論的問い」と呼び、その答えが命令や約束などの真理値を持たない発話となる問いを、「実践的問い」と呼ぶことにしたい。ところで、同一の文が、異なる問いに対する答えとなりえる。そしてその時の問いが理論的問いと実践的問いであるとき、同一の文の発話が、真理値を持つ主張の発話となったり、真理値を持たない意図表明の発話となったりする。

発話内行為の分類

事実を記述する真理値をもつ発話を「主張発話」と呼び、依頼、命令、約束、感情的な態度表明、宣言などの真理値をもたない他者に向けられる発話を、「意図表明発話」と呼ぶことにする。サールは、発話内行為を5つのタイプ(主張型、行為指示型、行為拘束型、表現型、宣言)に分けた。私がここでいう「意図表明発話」には、サールのいう行為指示型、行為拘束型、表現型、宣言が含まれる。サールは、**質問発話**を、依頼発話(行為指示型)の一種と考えているが、私は**質問発話**を、主張発話とも意図表明発話とは異なる第三のタイプの発話と考えている(これらについては、第3部で詳しく説明する)。

相関質問

ある発話が、ある問いの答えとして発話されるとき、その問いをその発話の「相関質問」と呼ぶことにする。

二重問答関係

「 $Q2 \rightarrow Q1 \rightarrow A1 \rightarrow A2$ 」は、問い $Q2$ の答えを得るために、 $Q1$ を立て、 $Q1$ の答え $A1$ を得て、 $A1$ を前提に $Q2$ の答え $A2$ を得る、という二つの問答関係の入れ子型の関係を表現しているものとする。

この関係を、「二重問答関係」と呼ぶことにする。また、 $Q2$ を $Q1$ の「より上位の問い」の問いと呼ぶことにする。 $Q1$ は $A1$ の相関質問であり、 $Q2$ は $A2$ の相関質問であるが、 $Q2$ を $A1$ の「より上位の相関質問」と呼ぶことにする。

§ 1 問いと推論は、どう関係するのか？

1、推論は問いを前提する

「推論とは、＜前提として置かれる一つないしそれ以上の命題が真であるならば、結論とされる一つの命題が必然的に真となるような命題の列＞である」と定義できるだろう。

(この定義に対する批判ないし疑問があれば、ミニレポートに書いて下さい。)

前提となる命題が与えられたとき、それらから論理的に帰結する命題、つまり結論となりうる命題は、おそらく常に、複数ありうる。

(この「おそらく常に」の部分に、批判ないし疑問があれば、ミニレポートに書いて下さい。)

例えば次の推論もそうである。

すべてのペンギンは鳥である

すべての鳥は卵生である

∴すべてのペンギンは卵生である。

私たちは、この二つの前提から一つの結論を導出できる。しかし、この二つの前提から導出できる命題には、他にも次のようなものが考えられる。

あるペンギンは、卵生である。

卵生でないペンギンはいない。

すべての鳥でないものは、ペンギンではない。

すべての卵生でないものは、鳥ではない。

したがって、私たちが現実には推論を行うには、結論となりうる複数の候補の中から一つを選択していることとなります。では、この選択は、どのように行われているのだろうか。

これを説明するには、推論がある問いの答えを見つけるために行われるのであり、推論の結論はその問いの答えになるのだ、と考える必要があるだろう。たとえば、次のような問いに答えるために推論が行われる。

ペンギンは卵生か？

すべてのペンギンは鳥である

すべての鳥は卵生である

∴ すべてのペンギンは卵生である

同じ前提を持つ推論であっても、もし別の問いに答えるために推論が行われているのであれば、別の文が結論として選択され、その推論は別のものになる。たとえば、次のように。

卵生でないペンギンはいるか？

すべてのペンギンは鳥である

すべての鳥は卵生である

∴ 卵生でないペンギンはいない。

(実践的推論に関しても同様なのだが、それについては、行為論を語る時に、説明するので、ここでは、省略する。)

ミニレポートに

1、上の例に倣って、

理論的な推論の例、同じ前提から帰結する他の結論の候補、それらの結論を答えとする相関質問を、つぎのように書いて下さい。

問い 1

問い 2

前提 1

前提 2

...

∴ 結論 1 = 答え A 1

結論 2 = 答え A 2

2 ヴィシニェフスキの「問いの推論」

ヴィシニェフスキ(Andrzej Wiśniewski)は、問いを結論とする推論を「問いの推論」(Erotetic Inference)と呼び、第一種と第二種に分けている。¹

(a) 第一種の問いの推論とその妥当性について

通常の推論の定義では、推論の妥当性は、すべての前提が真であるならば、結論がかならず真となること、言い換えると、その推論が真理性を保存すること、と定義される。この問答推論の場合には、問いが真理値を持たないので、この定義を採用することはできない。そこで、彼は、問いの「健全性」を、真なる答えを少なくとも一つ持つことであると定義し、この概念を用いてEIの妥当性を次のように定義する。²

第一種の問いの推論(E1)とは、真理値をもつ平叙文(一つないし複数)を前提とし、問いを結論とする推論である。例えば、次の推論になる。

アンドリューは、常に時間通りに来る。しかし、いまは、彼は遅れている。
何が彼に起こったのだろうか？

この前提が真ならば、アンドリューに何かが起こったことが帰結するが、それはここでの結論の問いの十分条件であり、この問いは健全である。ここでは、彼のいう条件(C1)をそのまま受容できる。

(C1) (真理から健全性への伝達)もし前提がすべて真であるならば、結論である問いは健全でなければならない。

ヴィシニェフスキは、(C1)だけでは、問いの推論が妥当であるには不十分であると考えた。なぜなら、次の二つの推論は(C1)を満たすが、良い推論だとは思えないというのが彼の主張である。

アンドリューは金持ちだ
アンドリューは幸福だ
∴アンドリューは幸福ですか？

¹ ポーランドには、問いの論理研究の蓄積があるが、ヴィシニェフスキは、この分野の現代の代表者の一人である。Cf. Wisniewski, *Questions, Inferences, and Scenarios*, 2013.

² N. Belnap は、疑問文の真偽を次のように定義していた。疑問文が真なる答えを持つとき、その疑問文は真であり、疑問文が真なる答えを持たないとき、その疑問文は真でない、と定義していた。ウィスニェフスキのいう問いの「健全性」は、ベルナップのいう問いの「真理性」と同じものである。

もしアンドリューが金持ちなら、彼は幸福だ

アンドリューは金持ちだ

∴ アンドリューは幸福ですか？

これらの推論では、問いの答えがすでに前提の中に与えられているので、これらの問いは冗長である、というのが彼の理解であろう。このような事例を排除するために、彼は(C2)を追加する。

(C2) (情報付与性) 結論である問いは、前提に対して情報付与的な関係になければならない。

(C2)の「情報付与性」は、「前提からは、結論となる問いのどの直接的答えに対しても伴立を欠いていること」と定義される。彼はここでの「伴立」は、古典的な意味ではないという。

この条件を踏まえて、彼が、第一種の妥当な問いの推論の例として挙げるのは、次である。

メアリーはピーターの母である。

もしメアリーがピーターの母であるなら、ビルがピーターの父であるか、ジョージが

ピーターの父である。

∴ 誰がピーターの父なのか、ビルか、ジョージか？

私には、彼が不適切な問いの推論の例として挙げた、第二の例は、不適切ではないように思われる。結論の問いの答えは、二つの前提から MP によって確かに非常に簡単に導くことができる。しかし、それでもこれを問いの推論と認めた方がよいのではないだろうか。さもなければ、MP の適用がもっと複雑に行われて、問いの答えがすぐには得られないようなケースも排除することになってしまわないだろうか。

彼はここでの「伴立」は、古典的な意味ではないという。もし古典的な意味の「伴立」を排除するならば、前提から論理的に問いの答えが帰結する場合、その問いを排除することになる。例えば、次の問いの推論を排除することになるだろう。

$n=5$

$m=7$

∴ $n+m$ はいくつですか？

この問いの答えは、算術の公理系と前提だけから論理的に導出可能である。もし情報付与性の定義の「伴立」を古典的な意味に理解するなら、この例も排除されるだろう。この場合には、簡単な算術の問いだけでなく、その答えが論理的に導出可能な数学や論理学の

問いはすべて排除されることになる。彼が、ここでの「伴立」は、古典的な意味ではないというときの趣旨は、前提から問いの答えが論理的に導出されるが、しかしそれが一見してわかるような単純な導出でない場合には、問いの推論として認めたい、ということかもしれない。ただし、この場合には、論理的な導出が簡単な場合と複雑な場合を明確に線引きが必要なのではないだろうか。ただし私には、それは困難であるように思われる。そこで、私は(C2)の「情報付与性」の定義を

(C2*)(情報付与性)どの前提も、そのままでは、結論となる問いの直接的答えとならないこと

と変更したい。ところで、次の例は、妥当だろうか。

アンドリューは、幸福である。

∴アンドリューは、健康ですか？

この前提が真であっても偽であっても、結論は健全であるだろう。しかしこの前提はまったく不要だということではない。この前提が存在しなければ、アンドリューは存在しないかもしれない、その場合には「アンドリューは、健康ですか？」は健全でない(真なる答えを持たない)ことになるからである。この推論では、(C1)「もしこの前提が真であれば、結論が健全である」が成り立っているし、(C2*)も成り立っているので、これは妥当な推論である。

以上の考察から、次の推論が妥当でないといえる。

(無前提)

∴アンドリューは、健康ですか？

アンドリューは存在しないかもしれないので、結論の問いは健全ではないかもしれず、この推論は妥当ではない。問いが真なる答えを持つためには、必ず何らかの前提が必要である。そのような前提を、問いの「意味論的前提」と呼ぶことにする。仮に、問いQの真なる答えをpとしよう。ここでpから論理的に帰結する命題はすべてpの必要条件である。そしてすべての命題は何らかの論理的帰結を持つ。それゆえに、すべての真なる答えは、必要条件を持つ。したがって、健全な問いは、何らかの意味論的前提をもつ。したがって、無前提に成立する問いは存在しない。

ところで、命題には、無前提に成立する命題、つまり「分析的に真」なる命題がある。例えば、 $p \vee \neg p$ がそうである。しかし、pが真理値を持たない文であれば、これは成立しない。

(b) 第二種の問いの推論とその妥当性

第二種の問いの推論は、一つの問いと、(ゼロないし一ないし複数の)真理値をもつ平叙文を前提とし、問いを結論とする推論である。例えば、次の推論になる。

アンドリューはどこへむかったのか？
もしアンドリューが彼の有名な傘を持っていたなら、彼はロンドンへ向かったのだr。

さもなければ彼はパリかモスクワにむかった。
アンドリューは、有名な傘を持って行ったのだろうか？

ヴィシニェフスキは、第二種の問いの推論が妥当であるための条件として、次の条件を挙げる。

(C3) (健全性・真理性から健全性への伝達)もし初期の問いが健全であり、すべての平叙文前提が真であるならば、結論となる問いは、健全である。

これは前提に問いが加わったことによる(C1)の拡張である。この(C3)と先の(C2)だけでは、この推論が妥当であるには、不十分である。なぜなら、次の推論が、妥当な推論になってしまうからである。

アンドリューは論理学者ですか？
ある哲学者は論理学者であり、ある哲学者はそうではない。
アンドリューは哲学者ですか？

この推論の問題点は、結論「アンドリューは哲学者ですか？」の答えを得られても、初期の問い「アンドリューは論理学者ですか？」の答えを見つけることができないという点である。そこでヴィシニェフスキは、結論となる問いの答えは、平叙文前提にもとづいて、初期の問いの答えを見つけるのに有用であるべきだ、と考えて、これを保証するために、次の条件を課する。

(C4) (柔軟な認知的有用性)結論となる問いへのそれぞれの直接的答え B に対して、初期の問いへの直接的答えの集合の空でない部分集合 Y があり、それは次の条件を満たす。

(♣)もし B が真であり、すべての平叙文前提が真であるなら、初期の問いに対して $A \in Y$ である少なくとも一つの A が、真でなければならない。

ここでいう「直接的答え」とは、「求められているよりも少なくも多くもない情報を提供することによって問いの要求を満たす[可能な答え]」³である。彼が例に挙げる妥当な第二種の問いの推論は、次である。

アンドリューは、どこに住んでいますか？
アンドリューは、ある西ポーランドの大学町に住んでいます。

³ Wisniewski, *Questions, Inferences, and Senarios*, 2013, p.18.

西ポーランドのどの町(複数)が、大学町(複数)ですか？

この結論の問いは、答えとして、「aとbとcが、そしてそれだけが西ポーランドの大学町です」というような答えを求めているのだろう。仮に、「aとbとcが、そしてそれだけが西ポーランドの大学町です」というような答えが真であるとすると、これと平叙文前提「アンドリューは、ある西ポーランドの大学町に住んでいます」から、「アンドリューは、aかbかcに住んでいます」を導出できる。ただし、これは、まだ前提の問い「アンドリューは、どこに住んでいますか？」の直接的答えだとは言えない。しかし、これにもとづいて、「アンドリューは、aに住んでいます」「アンドリューは、bに住んでいます」「アンドリューは、cに住んでいます」のどれかが真なる直接的答えだと言える。それゆえに、この推論は、上記の認知的有用性の条件を満たしている。

結論の問いの直接的答えのそれぞれが、平叙文前提と結合して、前提の問いの少なくとも一つの直接的答えを真とする場合に、結論となる問いは「認知的に有用」であるという。

(彼はここでの「初期の問い」と「結論の問い」の関係を「含意」⁴と呼ぶ。これとは別の仕方、問い Q1 が問い Q2 を「含意する」とは、問い Q1 の直接的答えの集合が、Q2 の直接的答えの集合を含むことである、と定義される場合がある。ヴィシニェフスキがここでいう「含意」はこれとは異なる。ここでは、初期の問いの直接的答えのおのおのは、それだけでは、結論の問い直接答えの集合に含まれていないが、平叙文前提の追加によって、結論の問いの直接的答えを含意することになる。)

⁴ *Ibid.*, p. 67.